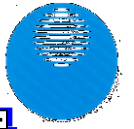


OSFだより

第124号 2015(H27)年春号



発行・編集 財団法人岡本国際奨学交流財団 263-0023 千葉市稲毛区緑町1丁目19番11号 TEL043-248-8808 FAX043-238-4138
osf-midorii1911@codacoda.ocn.ne.jp http://www.osf-family.com

OSF (Okamoto Scholarship Foundation) の活動案内 1、留学生宿舍の運営 2、留学生へ奨学金の支給 3、留学生の学習&人生相談・国際交流

陳 リョウ (H9奨学生、中国)

光陰は矢の如し、日本を離れて早くも15年の月日がたちました。昨年9月に機会があって、二人の子供を連れて日本を訪ね、財団の皆さんと会い、とっても楽しい旅でした。



私は今南半球のメルボルンに住んでいます。息子、娘ともオーストラリアで生まれ、いわゆるABCです(Australia born Chinese)。家で日本のエレメントが多少あったので、二人とも日本に対してとっても関心を持っているようです。特に食べ物に関して、家宝を数えるようにいつも口にしています——ラーメン、お寿司、とんかつ、お刺身、うどん、天婦羅、茶碗蒸しなど——。日本に行ったら全部食べたいとねだられました。次に興味を持っていたのは、やはり日本のアニメのキャラクターです。息子がウルトラマン、ピカチュウに、娘がHello Kitty、トトロに、そして二人ともクレヨンしんちゃんに夢中でした——。

子供が日本に対して好感を持つことは私にとって実に

うれしいことです。なぜならば日本は私にとって第二の故郷といっても言い過ぎではないくらいの存在です。18歳からの9年間、一人で日本で暮らし、様々な人と出会い、たくさん経験を積み、そして大学で学び、岡本財団に家族のような温かい援助をいただき、人生で一番輝いた日々を過ごしました。

今、専業主婦を務めている私が日本で学んだすべての経験を生かし、言語も文化も全く異なる国で子供と一緒に挑戦しながら成長しています。毎日日本式の可愛いお弁当を作ったり、学校のヘルパーをしたり、Multi-culture weekの時に日本文化を子供に紹介したり、子供と一緒にスカウトに参加したり、とってもチャレンジのある日々を送り続けています。

昨年、あるボランティア活動を通じて初めて身体障害者と接触、興味を持ち、半年をかけCertificate III in Disabilityを採りました。これから子供がどんどん大きくなるので、少しずつ子供を離れをしようと思って、この免許を取ることを決心しました。日本と比べて、英語圏の国はアジア人にとってますます溶け込みにくくなっているの、自分から何かを始めないともっと孤立してしまうと思います。

ご卒業おめでとう



◎3月6日、千葉大学徳久学長と財団の卒業生との懇談会が開かれた。学長の素晴らしい学識と人間性に接し、参加した5名の学生は感激していた。



来日したお父さんと論文を持って



2015年度前期行事予定

- 4月15日 会館生・家族寮例会
- 5月16.17日 奨学生南房総旅行
- 5月20日 会館生・家族寮例会
- 6月2日 理事会
- 6月8日 奨学生例会
- 6月17日 会館生・家族寮例会

- 6月26日 評議員会
- 7月9日 奨学生例会
- 7月12日 会館生OB会
- 8月5~7日 広島慰霊祭参加
- 8月中旬 鴨川海水浴
- 9月8日 奨学生例会
- 9月16日 会館生家族寮例会

寶偉 (2014 年度奨学生) 中国 (黒竜江省)

東京芸術大学 文化保存学卒業

10 年後の私

10 年後に自分の理想や願いが実現した状況を想像した。

自分の仕事が成功し、結婚し、子供もでき、子供を育てる生活をしているはずだと思う。

しかし、想像するだけでは理想を実現することができない。10 年後の世界はどう変化しているのか誰にも分からない。

ふと 2011 年の東日本大震災のことが思い出される。10 年前の私たちは、10 年後あのような大きな地震が発生することなど予想できなかった。地震は一瞬で私たちの命と希望を奪い去る。どんなに素晴らしい未来を想像してもそれは夢の浮橋のようなものだと感じる。32 歳の私は 10 年後の夢や目標、そして「なりたい自分の姿」はあるけれど、どう実現するかはまだ分からないし、まわりの環境がどうなるかもわからない。そもそも考えるのが億劫だ。

今は未来の不確実な変化を前に、ただ不安を感じる。人はよくわからない将来のことについては究極の楽観か究極の悲観に陥ってしまいがちだ。しかし、そんなとき、楽観的でもなく悲観的でもなく、「客観的」に考えてみてはどうか。

地震のことを例に挙げてみると私たちは将来のことを把握できない。しかし、今から 10 年後のことを予想し準備することはできるだろう。私は 10 年後の自分を想像するだけではなく、10 年後の自分のために今からできることを努力しなければならないと思う。そう考えれば未来への漠然とした不安は少なくなってゆくはずである。今日を一生懸命に生きることは、10 年後の自分への下準備をしているようなものである。自分の理想を実現するために今から目標を立て、行動することは重要であると思う。10 年の時間は長いように感じるが実際には短い。現在できることに一つ一つ一生懸命取り組んでゆくことで、一つ一つの小さな蓄積が時間と共にある一定の地点に達すると質的変化が引き起こされるはずである。

現在 32 歳の私は 18 歳のときの自分が当時どんな生活をし、どんなことを考えていたかを思い返してみた。18 歳の私は芸術専門学校に入学し、多くの専門知識や技術を学んだ。その頃には画家になりたいという思いがとて



中国のトップの美術大学に入学し、自分の夢に近づくよう努力した。

北京での 4 年間の大学生活の間

には古典の絵画技術を学び、日本の芸術や文化などにも触れる機会もあった。日本語を勉強し、日本人の友達もできた。これはすべて日本に留学するきっかけとなったと思う。「10 年後の自分」すなわち 32 歳である「現在の自分」は日本留学を達成し、自分が好きなことをやり続けている。過去の 10 年間で達成できたことは、それほど多くはないが、半分程は実現することができた。

現在、大事なことは、今日から考え方と行動を少しずつ変えていくことである。そして、将来の自分を計画し、現在の自分の研究に取り組み、それを積み上げていく。以下は 10 年後の自分のために行うべき 4 つの事項である。

1. 自分のやりたい仕事

10 年後、大学あるいは博物館で仕事をするのが私の目標である。そのために、自分の絵画制作に取り組み、仕事場では文化財の修理に関する知識や技術などを習得し、一つ一つ仕事の経験を積み重ねることが重要であると考えられる。10 年の間に国宝修理師連盟の修理師資格を取れるよう精進したいと思う。

2. 将来なりたい自分

お金を大切に、無駄遣いをしない自分。自分のことをばかりを考えるのではなく、他人のことにも配慮をすることができる自分。思いやりのある自分。親孝行をする自分。

3. 嫌な事を引き受ける

人が嫌がる事を引き受けるのは嫌なものである。誰もがそう思うはずであるが、人の信頼を得るには「人が嫌がる事を引き受ける」ということも重要である。

4. 努力をする

正確には「努力を続けていれば、誰にでもチャンスはやって来る」と確信している。

従って、何もせず怠けていては、チャンスは絶対にやっては来ない。

だからこそ、仕事で必要とされる資格を取得し、また、「将来はこんな仕事をしてみたい」というビジョンを明確にし、スキルを習得することが必要だと思う。

現在の努力が 10 年後に全て繋がっていくと思う。今からの準備や行動のすべてが 10 年後の自分を決める。私は今から未来への準備を怠らず、10 年後に自身の目標を実現し、人間的にも成長し、周囲の人からも信頼される人間になりたい。そして、感謝の心をもって、日々、精進していくことで、人間的にも更に成長してゆきたい。

孟 晗 (奨学生) 中国 (吉林省)
千葉大学工学研究科 デザイン科学専攻

自分の長所と短所

自分の長所と短所というのは、いつもなかなかうまく言うことができない。長く迷ってやがて、自分の一番の長所は、常に自問自省を重ねるといことがわかってきた。「人を知る物、智なり。自らを知る者、明なり。」と先哲の老子は言った。人間は知恵を得られなくとも平凡人として生きていけるが、日々愛を感じず、道理も見通さず、濁ったままに過ごすのでは、人間として失格ではないかと思う。そのために、自分を見つめることが人間として何より大切ではないのかと私はいつも思っている。

自問自省すれば、自分が自分とどうやって付き合っていくべきかがよくわかる。何かをしようとする前に「これはただ自分を楽に行かせる仕方じゃないか」とか、何かミスをして反省する時に、「これは自分に同情する言い訳ではないか」とか、何か失敗して運が悪かったのだと思おうとする時、「この偶然さの中で自分に努力が足りなかったからなのか」、或いは「性格に決められた必然さがあるのか」などの問いをよく自分にすれば、悩みも解け、人生の難しい選択肢も明弁できる。

さらに、自分を知るほどに他の人の思いもよく理解することができるようになる。相手の立場に立って考えると、相手の気持ちが自分の気持ちになり、相手の喜びや



悲しさに共感できる。そうすると、何の不満もなくなり、心から相手に何かをやってあげたくなる。私は今研究室では「宴会部長」の役割をもらい、一年生の「宴会部長」と一緒にスポーツ大会や新年会をプランした。今年は研究室内の陶芸教室をはじめ、さまざまなレク活動を考えている。メンバーが愉快だと思ってくれること、或はそのような人の心と心の繋がりの場ができたことが何より嬉しいと思っている。

しかし、考え過ぎて行動に移すのに時間がかかることが時々あり、これは私の短所だと思っている。日本に来て2年間に、異国で一人で暮らし、アルバイトも始め、研究室に入り、様々な経験をしたと共に、沢山の良師と良友に出会った。その方々と付き合っている間に自分の不足に気付いた上で、相手の良い見方や行いに感銘し、影響を及ぼされたことによって少しずつ改善してきたとは思いますが、これからもっと人との出会いを望み、大切に付き合いながら、相手からもっと学びたく思っている。そして考えることと動くことのバランスをもっとうまく取れるよう、自分がもっと優れた人間になるよう努力し続けたい。

楊 光 (奨学生) 中国 (吉林省)
千葉大学理学研究科 基盤理学専攻

留学生活を経験して自分で成長したと思えること

自分の性格で、一番気になっていたことは内気なところ。仲のいい友達と一緒にいる時は、活発ですが、知らない人の前ではすぐに沈黙したり、自分の主張や意見などを言えなかったりしてしまい、人に自分のことをちゃんと伝えられませんでした。

2009年に来日した時は日本語が全然わかりませんでした。新しい文化や環境で、心細く、うまく人とのコミュニケーションができず、周りに無視されるように感じました。生活のためアルバイトを探さなければなりませんでしたが、どこにも雇ってもらえませんでした。今までで、一番苦しい時期だと思いました。アルバイトが探せない原因を考え、自分の働く意欲や明るさが足りないことに気づきました。初めて、性格のことや来日の目的を真剣に考えるようになりました。考えたあげく、主体的に他の人と接し、自分の熱意、優しさ、主張を伝えることが大事だと思い、私は積極的に動くようになりました。バイト先の先輩の優しさや、



日本人の学生さんの物事への真剣な姿は、私の人生にいい影響を与えてくれました。

私は研究のことはもちろん、実験のプロセスや改善方法を考え、納得させるため、ゼミの時には論理的にみなさんに説明したり、後輩に実験内容を教えたりしました。研究だけに集中するのではなく、英語のレベルを高めるため、大学の English House に通って、ドイツやインドネシアの友達を作りました。それにより、異文化や考え方の違いを理解し、国際的視野も広がりました。同じ研究室にいる日本語が分からないインドネシアの方や中国人の方の日常生活の手伝いをしたり、もっとお互いに理解するため、いつも一緒に参加できる活動を企画したりしています。

日本に留学することで、環境が変わっても適応できる自信を持ち、大きく成長できたと思います。日本で就職する決意があり、諦めず目標に向かって、頑張ります。

3 v í 4 v c R • G v H v , ^ í 8 @ ° j M • Ø ([M
G b i † 2 K _ v S C I † b \$ Û I † @ 8 ; † 0 b O Z C € r K S

01 v 7 ¥ 5 . R R I † (>F17 á 0#Ö p \) @ ¶
¥ K O v m [† b 4 € * . u i † \ M) t _ O ¼ a Z
C € S

02 v 12 ¥ " ¿ Ç I † > & > F 12 9 # Ö p \ '
@ Û ; [¶ ¥ ¶ K 9 # Ö b ž " Ý [b 8 x ;
_ v g • K Z C € S

03 v 9 ¥ Ø * > , < I † (>F21 á 0#Ö Ž 4) @ ¶
¥ K > È I † † 4 € Z O ¼ a Z C € S

03 v 19 ¥ ° Û - Ç I † > & > F 17 9 # Ö Ñ Ö
á Ð î ' @ " [¶ K " x @ / b 1 * È @ O C
Z 3 ž Q : T W S @ | C ¶ Z W I W S

03 v 24 ¥ . , ¼ I † (>F6 á 0#Ö Ð P i ©
") µ @ ¶ ¥ ¶ H z Ç b H o v i 7 Ç v M) t _
_ B x ? _ ¶ K K Z C € S

03 v 28 ¥ Á - I † (>F18 9 # Ö • á í ")
µ @ , g ' / œ [¶ ¥ K O ¼ a Z C € S " ä) T
q i † ' 1 Ö I † v ¶ Z C € Z & K 8 i 6 è † 4 #
H K S

04 v 3 ¥ Û ! • © I † > & > † 5 á 0#Ö p \ > ' @
G [¶ ¥ ¶ K K Z C € S



š 0 á ° Ö I †



A - I †

. , ¼ I †

5 . R R I † \ 4 € * . u i †



5 7 , e I †



° Û - Ç I †



G I † b 2 e U w †

• á - - > | >



Ø * > , < I †

01 v G I # I † (>F18 ° á 0#Ö p \ > ' _
n È b i I † 1 # Ö

01 v 28 ¥ 5 7 , e I † (>F21 9 # Ö p \)
_ 6 x è 1 # Ö 3 v 13 ¥ _ " [¶ K K Z C
€ S

03 v 7 ¥ " - Û I † (>F26 á 0#Ö , \$) ^
- Ç Ý) @) g

03 v š 0 á ° Ö I † (>F26 á 0#Ö Æ Ö á
; Ý) @) g

p = Æ Á Í ß p i < \

Ö > 1 v > 1 ¥ > 0 > 1 ¥ # . | 1 0 0 1 Ý (@ 6 ä ? € S
2 K b 4 _ X 8 Z v 2 5 ^ H " O • † 8 I 8 S
> Á K 8 ^ ? †
8 X v 6 - @ \ : H J 8 r M

> | 5 . R I † b Ö í Ý ? > |
Ö ¥ c ° K 8 l @ 6 W Z Ó í Ý K r K S M Ö ¥ %
È G ' b M S 1 # Ö ¥ b > & f 8 Á í , • í @ 6 ~ r K S
@ Q b i 0 v i b \$ Û I † ? } b > & f 8 5 b M 4 S † Ö ¥
\$ Û K Z A r K S
, • 2 K ? } v } W S á 0 5 _ š m • \ • \ _ a ^ 8
5 8 [M @ \$ Û ? } † 1 p " g t v } W Z • \ _ : €
K ? W S [M
Ø ~ ? }] : K Z \$ Û K | : \ í W S ? * ° ? € S i
_ + † G W Z ¥ • b , • 2 K ? } " E Z v } W S (
1 I ? † " E S 8 \ i W S \ Á < r K S
5 u Z , • 2 K b \$ Û I † _ † 1 p K r M

œ ü O { # J ö J



ß p 7 J

01 v 7 ¥ , K 8 \$ (6 x _ 5 z ? I † (- % ± 8 Q \) @
4 E d € S 1 ° è 9 † | • K C > 8 ° 8 K r M

> Y ° í 3 á 9 > [

3 á 9 " + È > 8 Ç Û « Ö I † M (, \$) ^ - Ç Ý)

9 > 8 Ý í á I † (È ° ¼ Ö) P á ' • I † (- á » ¿ ©
") ° Û í I † (Ö œ < > ')

° 9 " E > 8 ° Û í I † µ (Ö œ ð 9 > 8 5 ^
q i † & 8 Q \ > ' Ð Ä Á í - I † > & Ý Ý « ± á > ')